

# 研究室環境の改善

——人が育つために——

細田 暁 正会員 横浜国立大学 大学院都市イノベーション研究院 教授

近年、働き方改革が提唱され、土木の職場でも独自の生産性向上等に向けた取り組みが行われている。それぞれの働き方・取り組みを通じて、各職場の魅力を伝え、「土木の働き方」のヒントを探る本連載の第3回は、大学における研究室環境の改善に向けた取り組みを紹介する。

## 研究室の目的

私の職場である横浜国立大学のコンクリート研究室の紹介をする。2003年10月に着任して、15年が経過した。研究室も生き物なので常に変化しているが、15年強の間、改善を重ねてきた。私たちの研究室は、教員・学生が自らを研鑽し、お互い学び合い、成長していくための場であり、研究・教育活動を通じて社会への貢献も求められる。その目的を高いレベルで達成するために、研究室の物理的な環

境やシステムの改善を継続している。

## 年度ごとのスタートと学生中心のコンペ

新年度は4月にスタートする。クリエティブな1年を皆で過ごしたいから、新しいものが生まれる雰囲気がある実験棟で新入生の歓迎会BBQを実施する。2006年の全国大会で琵琶湖にて開催されたコンクリートカンファレンスに初めて出場し、それ以降は、関東支部の大会に出場している。2回目以降は学生だけで取り組み、2011年



細田 暁 氏  
HOSODA Akira

2001年東京大学大学院博士課程修了後、東日本旅客鉄道で勤務。2003年より横浜国立大学に着任、2018年7月より現職。長持ちするコンクリート構造物のための研究や、土木史・防災に関する教育に注力している。

の総合準優勝がこれまでの最高順位である(写真1)。さらに、日本コンクリート工学会のキング・オブ・コンクリートにも2015年の初回から出場し、学生たちの力で優勝、3位、優勝、2位と教員たちも驚く結果を残してきた。学生たちはぶつかり合いながら、葛藤もありながら、チームというものを学んでいくようである。毎年8月最終土曜日のコンクリートカンファレンスの武蔵浦和における打ち上げでは、私も学生たちに交じって何ともいえない感動を味わう。

## 一級のものに触れて感じる夏合宿

夏合宿は研究室の看板行事でもある。赴任後の最初の夏である2004年から開始し、2007年の黒部ダム

から2泊3日とし、毎年続けている。日中は一級の土木遺産や建設現場などを巡り、夜は懇親を深めて春学期を振り返る。企画は数ヶ月かけて練り込む。訪れていない地方は私のルートである山陰地方と沖繩くらいである。2018年は、神戸駅に集合し、明石大橋の主塔に登り、四国に渡って旧香川県立体育館と香川県庁東館(丹下健三の設計)、青雲橋(田中賞およびfib賞。開発した三井住友建設の春日昭夫氏に解説いただいた)、満濃池、豊稔池ダム、上吉野川橋、佐川町の井勇生誕碑、一斗依沈下橋、黒潮町の津波防災対策を勉強して高知駅で解散した。一級のものを見て感じるだけでなく、お互いの感想を懇親会で共有することが重要と思う。

## スペース不足と対応策

近年は、秋の入学生も多い。横浜国立大学の中で土木系は突出して留学生の数が多く、国籍も多様である。私の研究室はほかに比べてまだ少ない方であるが、それでも現在10名程度の留学生が在籍しており、今後はさらに増える見込みである。在籍者数の増加に伴い、早速スペース不足の問題が顕在化してきた。

そこで2017年4月に、私は13年半住んだ個室を出て、教員・博士課程の学生・秘書が共住する大部屋をつ



写真1 準優勝のコンクリートカヌー大会

くった。2017年度は東京大学とのクロスアポイントメントで赴任された前川宏一先生もその大部屋の小机で仕事された。大部屋のアイデアは前川先生に後押しされて実現した。コミュニケーションが活性化し、プラスの効果が大きいと思うし、個人のスペースが少ないことは無駄を抱え込まない習慣につながった。2018年度の完全移籍に伴い、前川先生は隣の個室へ移動となったが、上記大部屋との通路ドアはほぼ常に開けてあり、風通しのよい環境を目指している。

## 機能性を高めるための居室群レイアウト

教員以外の部屋も小部屋ばかりであり、廊下のならびの中央付近にある私の以前の個室をミートイングルームとしてレンタルティンサーバーを置いた。私の私物の書籍を公開し、学会の書籍類、月刊誌等を閲覧できる部屋にし、活発に使われている。学生の部屋も半年に一回席替える。個人机を少しずつ減らし、フリーアドレスの大机を試行的に導入し、在籍者数の増加に先手を打って

いる状況である。現時点では、その努力もあり、上記のミーティングルームと、解析PC群をおいた解析専用ルームを運用できている。

10年以上前から、学生の実験室係とPC係をおき、それぞれ修士2年を責任者、修士1年生を補佐に付けて謝金を支払って研究室の運営をサポートしてもらっている。月に1回のスタッフミーティングを教員全員も含めて行い、研究室運営の方針の確認と課題の共有を行っている。

## OBOOGも招く冬の冬合宿

冬合宿も行っている。これは2009年度に初めて三崎で行った。夏とは全く趣旨が異なり、一泊二日で、初日は朝から夕食前まで研究ゼミ。近年は2月初旬に行っており、最終審査が間近の修士2年生と学部4年生がそれぞれ研究発表を行い、みっちり質疑も行う。なるべくOBOOGに参加してもらえよう休日開催としている。大ベテランのOBやOGも参加してくれ、最新の研究を見てもらい貴重なアドバイスをいただける機会となっている。年度の最終盤に向か

う直前の夜の懇親会も毎年激しい。

## 学生MVP表彰

審査会も無事(?)終了し、卒業論文の審査会の夜に打ち上げを行っている。その場で、学生の研究室MVPを表彰する。研究活動、各種のイベントへの貢献、雰囲気づくりへの貢献を勘案して教員も含めて投票し、1位から3位の発表と、教員のポケットマネーからの副賞の図書券を贈呈して毎年盛り上がる。毎年のMVPは研究室ホームページに永年表彰される。

以上のサイクルを終え、一息付いている間に立派に育った(?)学生たちは卒業し、4月になりまた新たなサイクルが始まる。ご承知の通り、大学は激しい改革の嵐にいいように痛め付けられているが、何とか冒頭の研究室の目的をはたせるよう、今後も改善が必要なのはいうまでもない。

### 参考文献

- (1) 小松裕史、木下果穂、中川恵理、田島涼、田中洋人・キング、オブ・コンクリートへの道――学生の主体的な取組みによる実践的教育の効果――、コンクリート工学、Vol.54、No.6、648～651頁、2016年6月

(担当編集委員：松崎裕)